美作女子大学・美作女子大学短期大学部紀要
2000, Vol.45, 99～106

報告・資料

授業「論じ合う」の運営について

How to Manage the Discussion Class, "Ronjiau"

松　岡　信　義

美作女子大学および美作女子大学短期大学部（以下,「本学」と呼称する）の授業科目の1つに「論じ合う」がある。報告者は，この授業「論じ合う」を，その開設以来（1995年度を除いて）毎年度担当してきた。この報告は，授業「論じ合う」が来年度から文字通り全学共通の基礎（基礎教育）科目となるこの機会に，これまでの授業運営の経験を学生の受け止め（授業評価）をくぐらせた知見として紹介することで，この科目の存在理由を確認し，併せて今後の授業運営に資することを期してなされるものである。

授業「論じ合う」のねらい

周知のように，授業「論じ合う」は本学の学部と短大のカリキュラムに異彩を放っている科目である。現在の学科構成（学部2学科，短大2学科）のうち，学部の児童学科と短大の生活科学科および幼児教育学科の3つにおいて,「基礎教育科目」（児童）ないし「基礎科目」（生科および幼教）の名称で,「考える」とともに卒業必修科目として設けられている。残る学部の食物学科においても,「考える」「論じ合う」は来年度から「基礎教育科目」に加えられることになっている。さらに，来年度新設の福祉環境デザイン学科においても,「論じ合う」は「考える」とともに，やはり「基礎教育科目」の中の卒業必修科目となる。文字通り，全学あげての共通科目となるのである。本学の『入学案内』では，この2つの科目について次のように紹介しているが，これはまさに『案内』のいう「美作女子大学の心」の実践的表現ともみなされるものであろう[1]。

> ユニークな「考える」「論じ合う」
>
> 変化のはげしい現代社会を生きていくため，また急速に進歩していく学問の現状を考慮し，それらに対応できる能力とは何かを考え，新たに設定されたカリキュラムが「考える」と「論じ合う」です。「考える」の授業では，単に知識を丸暗記するのではなく，学生が教員とともにテーマについて考え，意見を交換しあうことを通じて，思考力を養います。また,「論じ合う」の授業では,「考える」力を基礎に，自己の考えをどのように伝え，主張し，検証するかを実践しながら，コミュニケーション能力の向上をはかります。

ところで，本学がこの「考える」「論じ合う」を開講したのは1992年度である。きっかけは，その前年に大学審議会の答申（「大学教育の改善について」および「短期大学教育の改善について」等）が出され，それを受けて大学設置基準と短大設置基準が改正されたことにあった。これら設置基準の改正の目玉のひとつがカリキュラムの大綱化・弾力化であって，これをめぐって大学・短大での教養教育をどうするかという論議が巻き起こったのである。この時，本学では保母養成カリキュラムの改正作業を進める中で，大学・短大での基礎教育のあるべき姿をめぐって全学的討議が積み重ねられた。その中から改正後の設置基準でも謳われているように「幅広く深い教養及び総合的な判断力を培い，豊かな人間性を涵養する」ことをめざして，本学独自の科目「考える」「論じ合う」が生み出されたのである。この経緯の詳細については拙稿[2]に譲る

が，論脈をつなげるための必要上，最小限のことをここに繰り返し提示したい。

それは「考える」「論じ合う」の拠りどころ，「考える」「論じ合う」で培おうとする「基礎」の意味と程度に関することであり，この２つの科目を設置したコンセプトについてである。拙稿からの引用をもって，それを示す[3]。

1．「基礎」とは何か（基礎科目の目的）

私たちは「基礎」を重層的に把える。「基礎を身につける」ことが基礎科目の目的であるわけだが，私たちはそれを次のように考える。

①大学・短大において学問・研究を行なっていく上で，専門に関わらず必要とされる土台・いしずえとなる知識や技術を身につける。

②専門教育を受けるに必要な土台・いしずえとなる知識や技術，および，発展的な専門教育のための幅広い視野を身につける。

③高等教育を受けた社会人として備えておくべき，専門を離れたところでも生かされる幅広い教養を身につける。

④高校までの受動的な知識受容の在り方を見直し，大学・短大における学問・研究の姿勢についての意識を養う。

「基礎」の意味および「基礎科目の目的」をこのように措定した上で，次のように基礎科目を構成した。

2．基礎科目の構成（基礎科目と専門教育科目の関係）

基礎科目は《コモン・エッセンシャルズ》と《プロパー・エッセンシャルズ》の二つの範疇に分けられる。

《コモン・エッセンシャルズ》（共通基礎）

大学・短大の授業を受ける上で，つまり科学や学問と呼ばれるものを学ぶ上で普遍的に必要とされる，ものの見方，考え方，発表・表現の技術などを学ぶ。いかなる専門に進むにせよ必要とされる科目なので，全学共通の必修とする。

《プロパー・エッセンシャルズ》（専門基礎）

専門を学ぶ上で身につけておくのが望ましいと思われる，知識，技術，教養を学ぶ。専門により内容が異なるので，以下の基本方針に沿って，各学科・専攻で設定する。

①専門を学ぶ上で必要とされる土台・いしずえとなる知識や技術を学ぶ科目。

②専門をより広い視野で把える包括的科目。

③直接専門には関わらないが，専門の発展的追求の資源となる科目。

以上のことから，授業「論じ合う」は基礎科目の中の《コモン・エッセンシャルズ》（共通基礎）として位置づけられていることが理解されると思う。これまで，本学にあって食物学科を除くすべての学科・専攻で「考える」「論じ合う」が運営されてきたが，これらの科目の設置の経緯と趣旨からして，各学科・専攻のカリキュラムは，このような論理構造の上に組み立てられているはずである。

内容と方法，および授業運営の課題

本報告の主題は授業「論じ合う」の運営にある。これまでの叙述では，便宜上，２つの科目をセットにして扱ってきたが，これ以後は「論じ合う」に限定しての報告である。

「論じ合う」の内容と方法の概略的枠組は，当初から一貫している。『講義概要』には次のように記されてきた。

［授業の目的］

自分の考えたことを人に伝え，また人の考えていることを理解すること，そして意見がくいちがっているときに，よりよい考え方を求めて討論すること。また，考えたことを短時間に文章に書くこと，これらを目的とする。

［計画及びその概要］

10人が教室の前に出てパネラーになり，与えられたテーマについて，まず１人ずつ自分の主張を簡単に述べる。そのあと討論を行う。それ以外の学生は，その討論を聴きながら，その場で，自分の考えを短いレポートにまとめる。１回の授業でこのようなセッションを１回ないし２回行い，パネラーはセッションごとに交替する。このようにして全員がパネラーとフロアでのレポーターを経験する。５人の教員が，１人３回の授業を受け持ち，それぞれ独自の討論テーマを与える予定。

［評価方法］

セッションごとに提出されるレポートを主体とし，

パネラーでの討論の様子を加味して成績を決める。
又，出席状態も評価の対象とする。

これが「論じ合う」の内容と方法の概略的枠組（スタンダード）である。

このスタンダードに沿って授業を運営していくときのキー・ポイントは何か。さしあたり２点について述べたい。１つは，常に留意し必要な処置を施しながら，という意味でセッション遂行上の課題といってもよいものである。それは，そもそも様々な見解が予想されるもの，あるいは，意見の対立しているものをディスカッションのテーマとして措定するのであるから，限られた時間内では論点が収斂しきれない場合や，互いに隔たった価値観が平行・併存したまま論議が噛み合わないという場合への対応の仕方ということである。これをうまく処理していかないと，フロアの学生によって授業後に提出されるレポートも，提出者個人の中では完結したものになっていたとしても，その日の論議の不燃を反映したものにしかならないだろうからである。

いま１つは，評価に関する授業運営者の自覚についてである。評価は，「レポートを主体とし，パネラーでの討論の様子を加味して」ということになっているが，「論じ合う」ことの趣旨からすれば，パネラーとして「討論をどれだけリード，あるいはフォローしたか」「ユニークな見解をアピール，あるいは受けとめられたか」「違う角度で（複眼的に）みることができていたか」「討論の過程での自己の考えの推移を表現できたか」等の観点からの「ポイント」は大いに考量されなければならないものであろう。しかし，これは，テーマによって論議が沸騰したりそうでなかったりすることがあり，また，先に述べたように教員の「対応の仕方」にも関わるものであって，こういった事柄との関わりの中での「特定のパネラーの発言の優位性」の見極めはそう単純なものではない。こういったことに授業運営者は自覚的でなければならない，ということである。

ところで，報告者は，「論じ合う」が実施初年度を経た時点で，その効果を次のように挙げていた[4]。

ところで，実際に授業を受けもってみて確信を強めたことがある。一言でいえば「教師の得るところ大」ということに帰着するが，それは次のような意味においてである。すなわち，パネル・ディスカッション方式を採用することで，
①学生が立体的に見えるようになった。
②教師は，テーマの立て方に常に工夫を求められるので，授業への意識の在り方がより活性されるようになってきた。
③学生たち相互のみならず，教師もまた異なった観点の採用や価値観をゆさぶられることで，ともに「真理」「真実」「条理」「最善」「目的の見極め」……といったことに肉薄して行こうとする意識のなかにおかれるようになってきた。

実施初年度を経た時点で抱いた「論じ合う」の効果に対するこの確信は，現在の報告者のものでもある。そして，この確信は，「より一層そのようであってほしい」と願う限り，「課題」としても在り続けている。

バリエーションと工夫

では，その課題のために何を行なってきたか。かなり自覚的に取りくみ，１クール終了した時点で「まあ，まあ」という自己評価をしている今年度を例にして，報告者の場合を紹介する。以下は，クール毎に最初に行なうオリエンテーションで話した内容と実際のセッション進行中に適宜あたえた指示の中から，論議を活性させるために試みた工夫を箇条書きしたものである。

１．パネラーは８人とし，名簿順位の間隔を空けて配したこと。
　＊１つの長机に２人が座るようにし，４つの机を半円状に配して，発言をしている者がフロアの者たちだけでなくパネラー相互にも見えるようにした。名簿の順位が隣接している者同士は普段なにかと話をする機会が多いので，多少とも

「論を交えるのだ」という意識づけをしたつもりである。

2．1授業時間1セッションとしたこと。

＊これまでの経験から，2つのセッションを設けたときはいつも慌ただしく，落ち着いて議論ができなかった。1時間1セッションは，結果としてちょうど良かった。

3．授業の冒頭で前回のレポートを紹介したこと。

＊これは，これから始まるセッションでの議論への動機づけになる。「この前の授業でフロアからの発言としてはなかったのに，レポートではあんなふうに意見を述べている」「皆んな，こんなふうに考えているんだ」「ようし，この際，私も本心を言ってやろう」というふうに……。

4．基本はパネル・ディスカッション方式とし，必要に応じてシンポジウム方式を適宜取り入れたこと。

＊パネラーの殆どが同じような意見に偏って見える時や，パネラー間での議論が沈滞気味の時など，フロアから意見を出してもらった。必ず意見は出るもので，授業展開に大いに益した。

5．マイクを手にしたら，概ね10秒以内に何らかの発言をすることを申し合わせたこと。

＊「どうしても発言できないときはパスをしてよいが，パスは2回までしか許されません」ということを口約束してもらった。たわいのないとりきめであるが，ゲーム感覚で受け容れてくれ，結構「その気」になってくれる。

6．パネラーには，1人ひとりが「まとめ役」であるという意識をもってもらったこと。

＊パネラーは誰もが，2回目の発言からは，その「8人委員会」の委員長であるという設定のもとで，その議論をまとめる方向で振る舞ってもらった。具体的には，「このようにしましょう。皆さん，異存はないですね」という意味の言葉でその都度の発言をしめくくってもらうようにした。これは反論を呼び込まずにはおれない言い方である。

7．議論を終結させるいくつかのパターンを紹介しておいたこと。

＊議論が沸騰したり賛否双方がどうしても譲れないといった場合に，「継続審議」「両論併記」「委員長預かり」（場合によっては「各自の判断で」）といった事態収拾の仕方があることを知っておくことも必要であろう。

この他にも，場合によっては教員がパネラーやフロアを相手に「挑発的」に対抗意見を出してみたり，あるいは，テーマ設定に事例や例え話を援用するなどして，かなりの時間をかけてでもテーマの趣旨を十分理解してもらい，スムーズに討論に移行できるような手立てを試みたりした。あらまし以上が，報告者の試みた授業運営の工夫である。

ところで，この授業は，同一クラスを4人の教員がリレー式に担当するのだが，教員によって授業運営の仕方（流儀や方法）は多少異なっている。これは，この授業の担当教員チームの間で認め合っていることであるが，授業運営のバリエーションとして，学生にとっても新たな気持ちで次の担当者を迎えることになり，リレー式授業の減り張り（メリハリ）ある側面をかたちづくっているものと思われる。

学生の受け止め方

学生自身は授業「論じ合う」をどのように受け止めているのだろうか。

次に紹介するのは，報告者が今年度の授業で最初に担当したクラス（児童学科1年1組）の学生に，4回のセッションが終わった時点で（全員が1回ずつパネラーを経験し終えた時点で），授業の残り時間5分で書いてもらった感想である。「論じ会う」「論じあう」といった表記を「論じ合う」に統一した他は，句読点を含めて一字一句学生が書いたとおりを再掲したものである。敢えて紹介するのは，わずか5分で書くのであれば，勢い，強く印象に残っていることを書くことになるだろう，つまり，この授業がその学生にとってどのような意味をもったかというエキスを書いてくれ

るだろう，と考えたからである。

なにぶん時間が少ないということで，誤字や脱字をしないための配慮に時間を費やしたりせず，また普段なら当然漢字で表す表現でも差し当たり「かな書き」にするなどして，意識的にも無意識的にも一番書きたいことを書いてくれるだろう，という報告者の「読み」である。これがどの程度当たっているかの客観的な判断は難しいだろうが，報告者はこれも授業評価の試みのひとつと考えたい。それというのも，本報告を思いついたそもそもの動機は，実は「美作女子大学の心」としての授業「論じ合う」についての，この学生たちの声をまず紹介したい，ということにあったのである。感想を書いてもらったこのクラスの最後の授業の出席者は26名であった。感想は，この日の出席学生全員のものであり，内容も部分的なものではなく，そっくりそのままの全文である。

●私は，いい授業だと思いました。日頃あまり話さないひとの意見や考え方を聞くことができるし，いろんな考え方があるんだということもわかるので，自分の考え方だけにこしつすることがなくなったと思う。今までこのような授業を受けたことなかったので，いい経験になったと思う。(A)

●論じ合うとかディベートとか，自分の意見を言うのは，かなり苦手である。だから，この授業は好きではない。でも先生の授業の進め方が良くて，かたくるしくなくて，いい雰囲気だったので，言いやすかったし，良かった。でも，前に出ると言えなくなる。紙になら書けるけど……。最終的には，みんなの意見がいっぱいあって，すごいと思った。いろんな意見が聞けて，おもしろかった。(B)

●最初は論じ合うをすることにすごいいやって気持ちがあった。でも実際やってみて，自分の隣や前・後にいる友達の意見が自分とはまるっきりちがうっていうこともあった。さまざまな問題をとり上げてみて，普段友達同志では絶対話さないようなことを友達と話し合えてすごいいい経験になった。本当に楽しかったです。(C)

●フロアーにいて考えるのと，パネラーとして前に出て考えるのは，また違って，パネラーとして自分の意見を言うのは，自分の考えがなかなかまとまらないのでとても難かしかった。人前で自信を持って自分の意見をゆう事が私はできなかった。でも，この「論じ合う」を通して，いろんな人の考えを聞くことは有意義な時だったし，まだ最初だから，これからどんどん「人の意見を取り入れて，自分の考えをまとめる」という技術を身につけていきたいと思う。この講義のおもしろい所は，答えが出ないという部分だなと思った。私はこの講義はとても気に入りました。(D)

●「論じ合う」は私はすごい，良い勉強であると思う。どうやっていえば自分の意見をうまく周りの人に伝えることができるかという事を考えることができるし，自分の考えを人の前でいうという練習になると思う。松岡先生の問題定義はすごく考え深いものが多かった。自分たちが普段きにしていても深くまで追きゅうしないことをだしてくれて考える場そして新しい発見をさせてくれる場をつくってくれたように思う。1つの問題に対して自分とは違った意見をききまた考える。それってすごいことだと思う。これからも「論じ合う」はやっていくべきだと思います。すごく楽しい授業になりました。(E)

●今回，初めて，「論じ合う」という授業をしてみて，なかなか，いい取り組みではないかと思った。普段，新聞やテレビ，ラジオで見たり，きいたりすることを，あらためて，もう一度，考えることができた，すばらしい機会だったと思います。考えれば，考えるほど，分からなくなったりもするけど，それらの難しい問題を考えることは価値があると思います。来年からも，この授業はやってもいいと思います。普段，ききすごしているようなことをあら

ためて考えることのできる，良いチャンスにもなると思います。(F)

●正直に言って，ものすごく難しいです。一番最初の，まだやり方などがよく分からない時，前に出たので，ほとんど自分の意見が言えませんでした。これほど，自分の意見をまとめて，人に伝えるという事が難しいこととは思いませんでした。高2の時「ディベート」として，「高校に制服は必要か」という事について，同じような事をやったのですが，やはり，大学ではテーマが深く，自分の意見をまとめるのが大変で，時々，自分が何を言いたいのか分からなくなるときもありました。でも，自分の意見を相手に理解してもらうように説明する，いい練習になると思います。(G)

●この授業の感想を一言でいうと「おもしろかった」です。今までの授業の中ではわからなかった，一人ひとりの考えが見えてとても刺激的でした。この授業こそ「大学の講義！」って感じがしました。また，頭で思っていることをみんなに伝えることがこんなにも難しいとは思いませんでした。けれど，自分の考え以外のことを聞けたので視野が広くなったような感じがしました。この授業はこれからも続けていった方が学生のためにもなると思います。(H)

●4回あったけど，全部難かしい問題だった。どの問題も，これはこれが正解ということはできなかった。正しい答えはないなと思った。人それぞれの，いろんな意見があるんだなと思った。1コマ目にあるのは，まだ頭が起きてないから，頭がはたらかなくてきつかった。(I)

●この授業はおもしろいと思う。自分の意見をみんなの前で発表する事は，かなりの勇気がいる事なので，この事に慣れるためにも良いと思う。全体的にどのテーマも考えさせられるものばかりで，楽しかった。世の中には，考えるべきことがたくさんあり，それをみんなで話し合って改善していく事は，大切だという事がわかった。(J)

●自分の意見も言うことができるし他人の意見も聞くことができ1つのことに熱心にとりくめて，すばらしい授業だと思います。はじめは，自分の意見を言うなんてむずかしいしはずかしいし，いやだと思ってましたが，だんだんみんなの意見がとびかう中で自分の考え方がさゆうされるトコロで考え方ってかわるものでおもしろいとおもいました。1つのコトを中心にいろいろ広がってくる話題ってゆうことが本当におもしろかったです。自分の考え方が＋になる反面，なやまされることもありましたが，それなりにおもしろかったです。論じ合うをすると，自分の意見がしっかりもてるようになるとおもいました。(K)

●“論じ合う”を受講して，率直にいうとおもしろかった。いろんな意見がとびかう中，その意見に反対している自分と，流されていく自分をみているのが妙に楽しい。課題をていきしたら，後半になるにつれて，深いものになっていく。すみをつつくような人もいれば，核心をつく人もいる。いまからもこの講義は続くが，1つ1つていねいによく考えていきたいと思う。(L)

●「論じ合う」の授業をうけてみて，私がパネラーになって発言しないといけない立場の時，最低2回はしゃべらないといけないのに1回しか発言しなかった……自分が頭ん中で考えていることはいっぱいあるのに，前にでると緊張してしまって，いざマイクをもって言うとなると何も言えずじまいで終わってしまった。でも，この「論じ合う」は，みんなの意見とかいろいろきけて，考えもゆらぐことが多かった。パネラーになるのは恥ずかしいけど，楽しい授業だった。もっと自分の意見が言えたらよかったなあ。(M)

●「論じ合う」の授業は，なれないディベートだったからかもしれませんが，４回とも難しいでした。でも，人の前で発言するこの授業は，いいと思いました。私も，４回とも，いろいろ考えさせられたし，自分のためにもなったと思います。（N）

●「論じ合う」は，なかなか良いアイディアである。この世にいろんな人がいると同時に，それは考え方もいろいろあるという事なので，このことを知る良い機会であるからだ。私は自分の考えを持っているので，こういう機会はうれしい。自分以外の意見は自分の考えをより深めたり正したりしてくれるものだと考えている。論じ合うは楽しい。人間として成長できる時間だ。（O）

●わたしは，いろいろ意見を言うのが苦手だから，前に出たときは，すごくいやだったけど，いつも考えてる以上に深くいろいろ考えることができたし，いろんな人の意見をきいて勉強になったので，この授業があって，よかったと思う。（P）

●みんな１人１人意見がバラバラで，みんなの意見が聞けてよかったと思う。自分で言ったことは自分で責任をもたなければならないことも身にしみてわかった。（Q）

●「論じ合う」は楽しかったです。でも，自分の意見じゃない方にまとまったら，腹立たしくて嫌でした。今日の問題もあやふやなまま（←しかも私と反対意見の人で）終わったから，すごく納得いかない。でも，かなり勉強になる気がする。たぶん，なっているでしょう。来年からもずっとすべきです。（R）

●私は論じ合うの講義なんてすごく嫌だなあと思っていました。最初の回とかすごく緊張して意見が言えなかったりしたけど，４回やって，最後はすごく楽しくなっていました。人の意見も聞けるし，自分の意見も言えるし，私はすごく良い講義だとおもいました。あまり難しいテーマだと困難することもありますが，考える力が付いていいと思いました。続けてほしいです。（S）

●普段は，ニュースとかで，それに対して反対したり賛成したり自分の意見でしかなかったけど，この授業を受けて，自分の意見と反対の意見を聞いて，あ，確かにそうだと考えがかわったり，やっぱり，私は○○だと思う，など，あまり考えてなかったことが，深く考えさせられたりして，いい経験になったと思った。（T）

●あまりにもテーマが難しかったと思う。例えば，“ハゲタカにねらわれている子供の写真”とか。どう論じ合うべきかわからなかった。でもこの授業を通して，自分の意見は必ず持つべきものだということもわかった。（U）

●論じ合うという授業がある事に対して，私は，すごくいやな印象が大きかった。論じ合う事もにがてだし，くつうでした。でも自分の意見を言う事，人の意見をきく事は，大切だと思いました。いろんな意見をきく事によって広い心をもつことができました。これからもこの授業は続けていってほしいです。（V）

●私は人と意見がいいあえたので楽しかった。最後，挙手をしたのにあてられなかったのはくやしかった。論じ合うで，人のいろんな意見がきけることで，自分の視野が広がったように思える。不満をいうとすれば，テーマがおかしいと思うことがあった。ぜ・否をきめるのにてきしていることと，てきしていないことがあると思う。そのテーマにした先生の考えがききたかった。（W）

●「論じ合う」の授業を受けてみて，いいと思うけど，でもこの授業で評定をつけるのはどうかと思

う。意見をもっていてもうまく言えずにいる人も多いと思う。だから，評定をつけるのではなくて，そういう人が自分の意見をみんなの前で言えるように段々なっていけば，私はそれでよいと思う。（X）

●答えが出ない方がおもしろい。かなりたのしかったです。これからもいろいろな問題に傍観者としてではなく取りくんでいきたい。（Y）

●いろんな人の意見がきけてたのしかった。自分と人とは，やはり考え方がちがうので，よかった。でも，もんだいがむずかしくて，わからないときがあったので，もう少しわかりやすいもんだいの方がいいと思う。（Z）

以上が授業「論じ合う」に対する学生の感想（受け止め方）である。この報告全体からすればかなりの部分を占める全員の感想の「全文の一括掲載」を敢えて行なったのは，繰り返すことになるが，授業「論じ合う」に対する学生の生の声をまず聴き取ること，それを通してこの科目の存在理由を確認すること，そしてこれを励みとして今後の授業運営に資すること，という目的があったがためである。紹介した26名の感想の詳細な吟味・分析はここでは行なっていない。しかし，5分間で書かれたものであるだけに全員のものを通読するのにもさして時間はかからず，また，「率直に」「エキス」が書かれているものと思われ，文意をとりまちがえることもなく容易に把握できるものと思われる。「5分間の感想」というかたちでの「授業評価」が本報告の目的をどの程度カバーし得うるか。ご意見を伺いたい。

［註］

1）『2000年度 入学案内』（美作女子大学・美作女子大学短期大学部）pp. 5～6
2）拙稿「『基礎』概念の整理を踏まえたカリキュラムの編成－大学（短期大学）における教養教育と改正保母養成教育課程－」『短期大学教育』第50号，日本私立短期大学協会，1993年
3）同上，p. 55
4）拙稿「授業『論じ合う』の効果と課題」『学報』第29号，美作女子大学・美作女子大学短期大学部，1993年12月